

第58回 美少女スター、近藤圭子の知る人ぞ知る名曲

日本中の男の子たちを熱狂させたテレビドラマ『月光仮面』を制作した宣弘社プロの西村俊一は、番組終了後の昭和34年7月、西村の父親と戦前から親交のあった人気作家・高垣降の作品『豹の眼』をテレビ映像化、主演・大瀬康一の相手役(中国王朝の娘・錦華)として、『パン売りのロバさん』や『海ほおずきの歌』などの童謡で知られ、当時16歳になっていた近藤圭子を抜擢、劇中で挿入歌『少女錦華の歌』を歌わせます。作曲は『月光仮面』で評価を得た小川寛興、作詞は童謡『かわい魚屋さん』『みかんの花咲く丘』で知られる加藤省吾が指名され、作曲の小川は『快傑ハリマオ』でハリマオの原型となった戦前の大映映画『マライの虎』の主題歌(曲・鈴木哲夫)にオマージュを捧げたように、恩師・服部良一の名曲『蘇州夜曲』を念頭に置いたような優雅な曲に仕上げられています。

時代を少し遡った昭和30年前後、現在のようにおびただしい数の十代

スターが誕生することのなかった歌謡界ですが、レコード業界ではそれとは別に、「豆スター」と呼ばれる

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも



堀井六郎
絵・松本浦



声変わり前の少女を中心とした童謡歌手を多数輩出、大きな人気を博していました。

川田孝子、古賀さと子、伴久美子などをはじめとして、少女雑誌の表紙を飾った松島トモ子、小鳩くるみ、後に歌謡界でも活躍する安田章子(由紀さおり)、小宮山幸子(二宮ゆき子)、本間千代子ら、今のアイドルの先駆けといえる多くの少女スターが誕生、ステージが特設されたデパートの屋上や遊園地には母娘連れのファンが殺到するほどの人気ぶりだったようです。

そうした「豆スター」のなかでもその美少女ぶりで男女を通じて高い人気を誇ったのがリボンのよく似合う近藤圭子でした。少しだけAKBの柏木由紀を思わせる風貌ですが、

十代の近藤の映像は平成の同年代少女からは感じられない大人の色香を感じさせます。

宣弘社の西村は、続く『快傑ハリマオ』でも近藤圭子を登場させ、ドラマの舞台となった東南アジアのジャワ島をイメージさせる挿入歌『南十字星の歌』を近藤に与えます。

「ハリマオ」の話題が出る際に私が思い出すのは、三橋美智也の歌う主題歌、仁丹ガムを数多く購入して手に入れた虎の顔のバックル付きベルト、主人公を真似て遊ぶときに欠かせなかったサンングラスと長いターバン、日本語で話す現地の少年タドン小僧(時代を感じさせるネーミングです)あたりなのですが、実は、それらとともに深く記憶に刻まれているのが、憧れのお姉さん、近藤圭子が歌うこの名曲でした。

近藤圭子が童謡歌手から大人の流行歌手へと階段を昇り始めた記念碑的な歌でしたが、残念ながら彼女は22歳で芸能界を引退します。その存在は、日本から見ることのない南十字星にも似て、数あるスターが居並ぶ日本の星空では見えずとも、限られた人の心の中で、いつまでも輝き続けることでしょう。

ほりい・ろくろう 昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。「私の「昭和 대중歌謡考」第4集「しあわせになるうね」(グスコ出版)が好評発売中